カナダ人物記⑨

芸大オーケストラの指揮者
ビクター・フェルドブリル

日加国交五十周年を二年後に控えた一九七七年、東京芸術大学の福井教授からカナダ大使館にひとつの提案が持ち込まれた。「五十周年記念に、カナダから音楽家を呼んではどうか」――というのである。福井教授は、候補者のねらいもつけていた。大使館にも全く異存はなかった。そしてカナダ側も一人の音楽家を推せんした。それは、期せずして、福井先生が選んだ音楽家と同一人物であった。トロント大学オーケストラ学部の学部長でトロント交響楽団青少年オーケストラの指揮者、ビクター・フェルドブリル氏である。

こうして一九七九年、芸大に初めてカナダ人指揮者が誕生した。そのときは、三か月間の契約だった。契約期限が切れると、芸大はぜひ戻ってくれるよう要請した。そして昨年四月、フェルドブリル氏は十四年も勤めたトロント大学を辞め、二年契約で芸大に帰ってきた。

それ以来、芸大で客員教授として指揮を教え、また芸大オーケストラおよび芸大学生オーケストラの指揮者を勤めるかたわら、新日本フィルハーモニー交響楽団や東京フィルハーモニー交響楽団など在京九楽団のうち六楽団、それに宮城交響楽団や札幌交響楽団でも指揮をとるなど、日本で忙しい日々を送っている。

――ビクター・フェルドブリル。一九二四年、トロントで生まれ、十七オでトロント交響楽団を指揮。ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックで和声法と作曲、ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックで指揮を勉強したあと、カナダでトロント音楽学校交響楽団のコンサート・マスター兼副指揮者。その後、トロント交響楽団およびCBC交響楽団の第一バイオリニスト、CBC交響楽団の客員指揮者、ブラッセル国際博（一九五八年）でのハート・ハウス交響楽団指揮者、BBC客員指揮者、ウィニペグ交響楽団指揮者、カナダ青少年交響楽団常任指揮者、トロント大学交響楽団指揮者、トロント交響楽団常任指揮者、カナダ室内合奏団指揮者、カナダ歌劇団指揮者……などを歴任。

ビクター・フェルドブリル

「もし一人の作曲家しか選べないというなら、モーツァルトの作品だけを演奏したい」というほどモーツァルトに心酔しているフェルドブリル氏だが、ほかの音楽も嫌いではない。騒々しいロックを除けば、ジャズやオペラなども好きだ。オペラを指揮したこともあるし、ジャズやポップスを曲目に加えたこともある。

「作曲家の中には『音楽はこういうものでなければならない』という強い考えがあって、自分の好きな音楽以外の音楽に心を閉ざす人もいますが、私はいろいろなものを楽しみたいですね」――そういうフェルドブリル氏は、琴や三味線、尺八などの音もいたく気に入っている。

日本の作曲家としては、特に武満徹、松村禎三、渡辺浦人、間宮芳生（みやお）氏などが好きで、ぜひカナダに紹介したいという。

フェルドブリル氏の一大功績は、カナダ出身の音楽家やカナダ人作曲家の作品を積極的に登用したことだ。『カナダ音楽大典』に「フェルドブリル氏は、その指揮者生活を通じて、これまで指揮したあらゆるコンサートにカナダ人の作品を少くとも一点は加えるようにしてきた」と書かれているように、ハリー・ソマーズ、ハリー・フリードマン、ジョン・ワインツワィッグといった作曲家の作品を国内外で紹介するのに、彼ほど熱心だった人はいないだろう。

「指揮者には、自分が最もよく知っている自国の作曲家に手を貸していく義務がある」というのが彼の言い分である。

同じ気持ちは、有能な若手音楽家にも向けられた。フェルドブリル氏の音楽活動の半分は青少年オーケストラの育成であり、彼のもとで演奏家や指揮者として世に出たカナダの音楽家は数知れない。

編集後記

●発行がずいぶん遅れましたが、「日本におけるカナダ研究」特集号をお届けします。カナダに関する学問的関心が、さまざまな分野にわたり、また多くの大学に広がっていることに、いささかの感銘を覚えます。研究者の層も一歩一歩厚くなっているようです。

●本紙でご紹介した先生方や研究者以外にも、カナダ講座を開き、あるいはカナダ研究をしておられる方は、もちろん沢山おられます。しかしできるだけ分野の異なった方々をご紹介したいということもあり、またスペースの都合もあって、割愛せざるを得ませんでした。

●「日本カナダ学会」のほか、「カナダ文学会」もできました。日本におけるカナダ研究が、一層充実・発展するよう、期待しています。

●今号は、多くの大学および先生方に大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。
〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部